東北大学医学部保健学科 同窓会新聞

発行人　進藤千代彦
発行所　東北大学医学部保健学科
仙台市青葉区星陵町２の１
編集人　東北大学医学部保健学科同窓会新聞編集委員会
編集委員　高根侑美、武石陽子、鳴海奈津

東北大学東北メディカル・メガバンク機構 設置記念インタビュー

東北メディカル・メガバンク機構は、東北大学に２０１２年２月１日に設置された、１０年間を予定している時限の部局です。今回、機構長である山本教授に話を伺いました。

東北メディカル・メガバンク機構長　山本雅之教授

創造的復興の「核」

〈Q1〉
どのような目的から東北メディカル・メガバンク機構は設立されたのでしょうか？

〈A1〉
東日本大震災により甚大な被害を受けた東北地区の再生に向けて、今必要とされているのは単なる復旧ではなく、東北地方の発展に向けた創造的復興です。東北メディカル・メガバンク機構は、復興事業を進めていく上での「核」として立ち上げた機構です。このプロジェクトを始動する前に話し合ったことは、どのようにして疲弊した東北地方の医療を立て直すか、震災による健康影響を最小限に抑えるための有効な手だてはないか、そして、最先端の研究成果を最初に東北地方に提供するためにすべきことについてでした。そこで掲げたのが、地域医療再生、世界最先端の研究拠点の設立、医療産業育成の大きな3つの目標です。さらに、この議論の中で、今の東北地方にしかできない世界最先端の試みとして、複合バイオバンクの構築を行うことにしました。複合バイオバンクとは、患者、住民の生体情報や診療情報、そして、サンプルを一元的に管理するシステムです。これを医療イノベーションの基盤として、東北から全世界に情報を発信していきたいと考えています。

地域医療の整備と最先端の研究

〈Q2〉
東北地区の復興に向けた具体的な方法はどのようなものでしょうか？

〈A2〉
まず、東北地区の地域医療体制の整備として、地域共有型の電子カルテの導入を検討しています。これによって、誰もがどこでも質の高い医療を受けることができるようになります。また、地方の医師不足を解消するために、循環型医師支援体制を確立し、大学と地域病院が一体となって医療系の人材がキャリアパスを磨くことができる支援を行うことを検討しています。

次に、計画しているのがコホート研究に立脚した新たな医療の創造です。コホート研究とは、病気にかかる前後の生体情報を比較することで病気の原因を探索する研究です。東北メディカル・メガバンク事業では、生体情報として調査対象者のゲノムを調べるゲノムコホートに取り組みます。沿岸部を中心とした地域住民コホート、妊婦さんからの協力を募って行う3世代コホート、病気を患う児童を見つけ出す地域子どもコホート、この3つのコホート研究を検討しています。

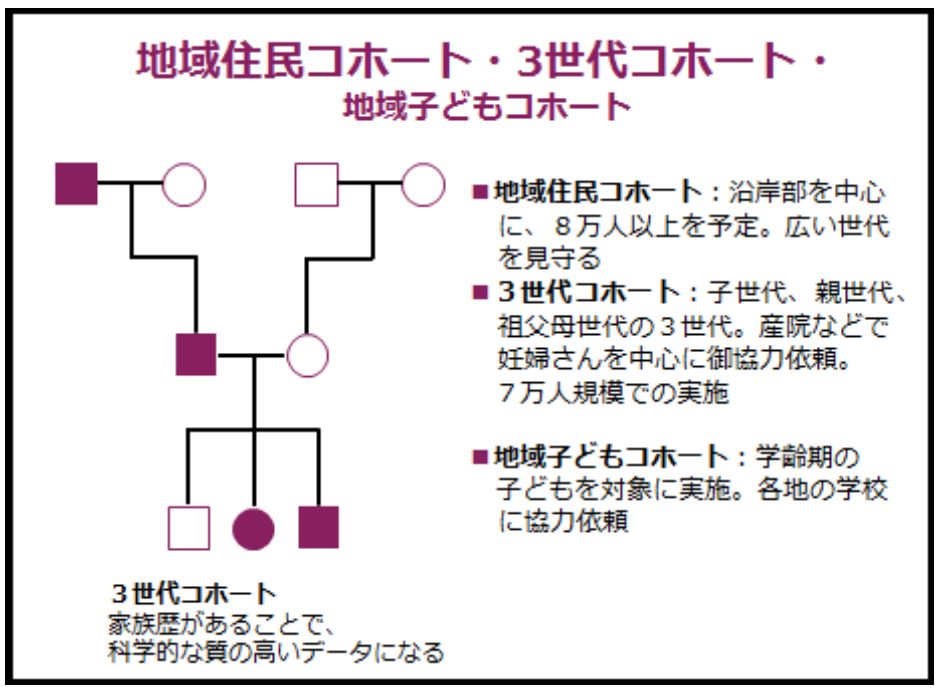
コホート研究から得られたデータから、ゲノム情報に基づいた個別化医療、予防医療を推進することで、研究成果をいち早く東北地方の人々に還元していくことを目指します。

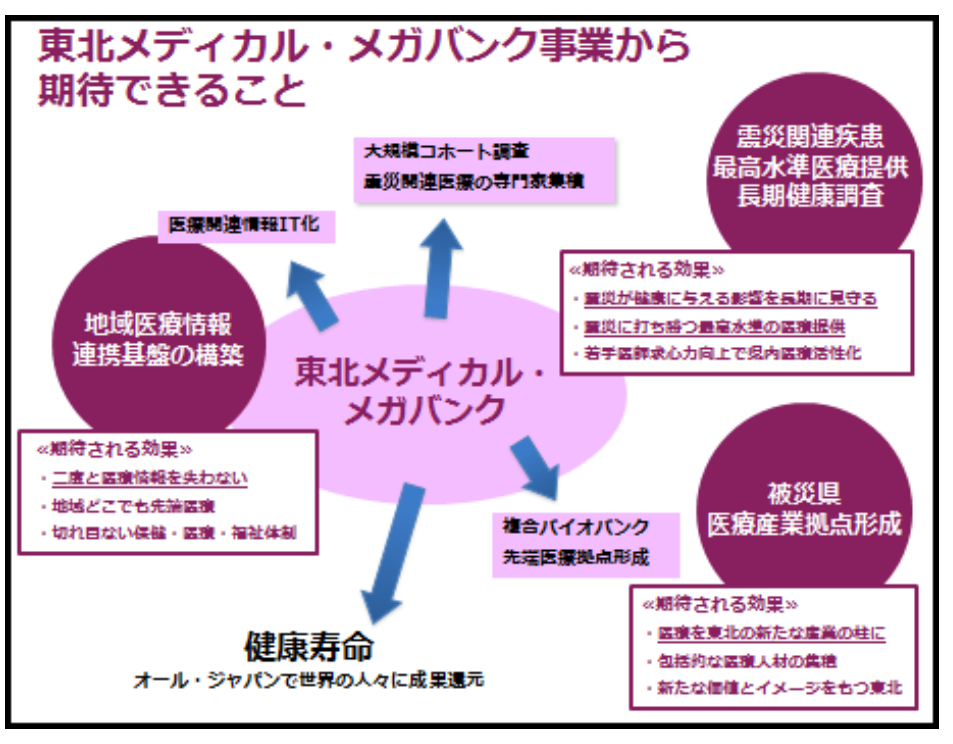
健康寿命世界一を目指す

〈Q3〉
期待される成果としてどのようなものが挙げられますか？

〈A3〉
大規模なコホート調査を行うので、震災が健康に与える影響を長期に渡り見守ることができます。そして、コホート調査の結果を活用することで、震災に打ち勝つような最高水準の医療を提供できるということ、さらに若手医師求心力向上で県内医療活性化ができる可能性があること、これが期待できる効果の1つだと考えています。

期待される効果の2つ目としては、地域医療情報の連携基盤を構築することによって、二度と医療情報を失わない、地域のどこにいても先端医療を受けることができる、切れ目





の無い保健・医療・福祉体制を確立できる、ということが挙げられます。このために何が一番重要かというと、地域共有型電子カルテ網を作るということです。紙のカルテは流れてしまいますが、電子カルテはなくなることはありません。地域のどこにいても見ることができるカルテを作り、医療情報を地域で共有していくことが大切だと考えています。

３つ目は、最先端の医療研究拠点ができることによって、それに協力する企業が集まり、医療を東北の新しい産業の柱にできるということです。また、医療研究拠点の形成により、包括的な医療人材の集積が可能になります。これらを通して、東北に新しい価値とイメージを構築できると考えています。

そして、これら３つの成果を統合することで、最終的には健康寿命日本一、世界一を目指すことを考えています。

ゲノム医療・個別化医療の推進

〈Q４〉

東北メディカル・メガバンク事業を通して、科学や社会へ還元できることは何でしょうか？

〈A４〉

今後はゲノム医療の時代になるので、ゲノム解析、ゲノム科学の進歩が非常に大切になります。東北大学の研究手法や研究の発展の方向としても、ゲノムを視野に入れた研究がどんどん盛んになっていくと思います。人のゲノム配列の解析がそれほど難しくなくなる、そのようなことが大切だと考えています。東北メディカル・メガバンクの事業を通して、全ゲノム解析やエクソン解析等がどんどんできるようになり、それが臨床の現場で応用できるようになっていくことが、科学に対する還元になると考えています。

また、遺伝子と環境と病気の関連性を明らかにすることによって、個人個人にあった医療を実現できるようになります。個別化医療、個別化予防実現に向かって医学が進んでいくこと、これこそが東北メディカル・メガバンク機構が社会に還元できることとして、大いに期待できることになります。

保健学科生の力が必要不可欠

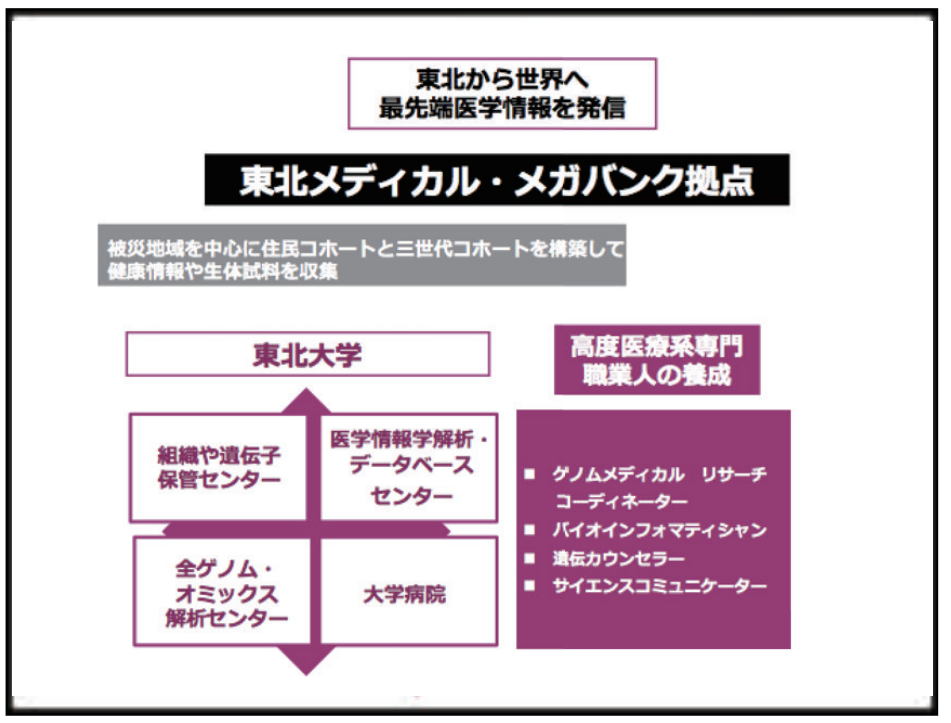
〈Q５〉

保健学科の学生や卒業生に期待することはありますか？

〈A５〉

東北メディカル・メガバンク事業は多数の人材がいないと成り立ちません。これからの医療はチーム医療なので、お医者さん一人でできるような医療ではなくなります。今までは、医師と看護師と薬剤師でしたが、今後はさらに医療系の高度専門職業人がゲノム医療の現場にどんどん入ってくる必要があります。そこで、東北メディカル・メガバンク機構の目標の１つとして、高度医療系専門職業人の養成をしていきたいと考えています。具体的にはゲノムメディカル・リサーチコーディネーター、バイオインフォマティシャン、遺伝カウンセラー、サイエンスコミュニケーターと呼ばれる職業の人たちです。また、東北メディカル・メガバンク事業では全ゲノム・オミックス解析センター、医学情報学解析・データベースセンター等を作り、ゲノム解析をどんどん進めていく予定です。保健学科の学生、卒業生におおいに期待したいことは、ゲノム解析、オミックス解析の最先端で働くような研究者、技術員になって欲しいということです。特に、ゲノム解析ではバイオインフォマティクスといって、大容量のデータを使っていくデータ駆動型のサイエンスが重要になります。ですから、バイオインフォマティクスに強い研究者や医療人が必要なので、バイオインフォマティシャンとして身を立ててくれる人もいたらすごく助かります。一番の期待は、今後必要となる高度医療系専門職業人に保健学科の学生、卒業生がどんどん挑戦してくれることです。専攻別に話すと、保健学科の検査診断技術科学専攻や放射線科学専攻の人はオミックス解析センターで活躍する場があると思っています。それから、東北メディカル・メガバンクの事業には、保健師さん達が１５万人を集めて行うコホート調査がありますが、看護学専攻の人にはこの調査のリクルートや追跡の中心的な役割を担ってくれることを期待しています。この東北メディカル・メガバンクの事業は、実は保健学科の学生や卒業生の貢献がないとできない、そのような事業だと思っています。

東北メディカル・メガバンク機構
http://www.megabank.tohoku.ac.jp/



看板除幕式の様子（2012.04.02）

新学科長のご挨拶

同窓会会員皆様にはご健勝のこととお慶び申し上げます。

平成２４年４月に医学部・医学系研究科が新体制となり、保健学科長を拝命いたしました塩飽（しわく）と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

会員の皆様にこの紙面をお借りしてごあいさつ申し上げます。

前任の吉沢豊子教授の後任として、保健学科のなおいっそうの発展に尽力する所存です。会員の皆様には今後も引き続き保健学科の教育、研究、実践活動にご支援を賜りますようお願い申し上げます。

保健学科は２００３年１０月に設置され、来年１０月には創設１０周年を迎えます。これまで５回卒業生を社会に送り出し、卒業生は各専門分野でめざましい活躍を見せており、年々その評価は高まっています。今年度は初の大学院博士課程後期の修了生が誕生する見込みであり、大学院保健学専攻の完成年度となります。このように、今年から来年にかけて保健学科、保健学専攻は大きな節目を迎え、さらなる発展を目指して行かねばならないと考えております。

保健学科の理念は，社会状況や保健・医療を取り巻く環境の変化のなかで、医療人としての社会的使命を果たすために、人間性豊かで幅広い教養と確固たる倫理観を持ち、科学的な知識と技術、そして冷静、緻密な総合判断力を備えた医療専門職を育成することです。

日本の医療は、科学の進歩と急激な社会の変化とあいまって、めざましい発展をとげてきました。その過程で少子高齢化が進展し、疾病構造の変化とともに慢性疾患や障害を抱えて生活する人々が増えてきています。このような背景から、人々の生活の質を重視し、疾患の治療とケアだけでなく、疾患の予防から健康管理までを一貫して考える総合的医療が求められるようになりました。そして、人間がいかに生きるかを問いかけられている時代にあるとも言うことができます。

教育や研究という方法を用いつつ時代の要請に応じて柔軟に対応することは、大学という組織のミッションであることは言うまでもありません。高度化、複雑化する医療技術に的確に対処し得る高度な知識と技術を有するとともに、その独自性、専門性を生かしつつ、他の医療技術専門職者と協調してチーム医療・チームケアを実践できる人材の育成や、将来、医療技術科学の発展を担い、教育・研究・行政において指導的役割を果たしうる人材を育成することも時代の要請に適合した保健学科のミッションだと考えています。平成２４年４月５日に東北大学入学式が行われ、保健学科は１４６名の新入生を迎えました。私は保健学科を代表して新入生に次のようなメッセージを伝えました。「震災で甚大な被害を被ったこの東北の地で、人々の幸福を願って科学を学ぶ意義が確かにあります。新入生の皆さんには、実態のない思想としての「絆」よりも、強い意志のもとに行動として示す「絆」を、ぜひここで学び取って欲しいと思っています。また、学生時代に、この地で、どのような時を積み重ねているかを自分に問いかけ続けて欲しいとも思っています。我々教職員は、今年の春に学生や卒業生の皆さんとともに学び歩んでいく決意をあらたにしたところです。皆さんには保健学科のミッションを理解し、研鑽を積み、優しさと賢さを身につけた専門領域のトップリーダーとなることを期待しています。

これら保健学科の理念、ミッションを実現し達成していくためには、在学する学生や教職員の努力だけではなく、同窓会会員の皆様のご理解と扶持を必要といたします。

同窓会会員の皆様には、保健学科発展のために今後も温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

保健学科長　塩飽 仁

新任先生のご紹介

今年度も新たな顔ぶれが出揃いました。ここからご紹介させていただきます。新しい先生方のご活躍によって、保健学科がより一層活気づくことを願っています。皆さん、できれば直接お会いして、話を聞いてみて下さい。

精神看護学分野　講師　吉井　初美

私は、福島県耶麻郡塩川町（現在は喜多方市に合併）という小さな町に生まれ、高校までその地で過ごしました。もともと勉強嫌いで成績が悪かった私は、将来の夢や目標など無いまま地元の高校を卒業し、工場に就職しました。初任給８万円を現金で貰った時に嬉しくて手が震えたことを、今でもはっきり覚えています。

その後東京に行きＯＬなどをして過ごすうちに、ふと、「何かが違う」ということに気づきました。今にして思うとそれは、「やりたい仕事をしていない」という事実に気づいたのだと思います。その時二十代後半だった私は、看護師になることを決意し看護学校に学びました。そして三十代半ばで臨床に出て精神科看護に従事し、現在こうして精神看護学の教育に携わらせて頂いております。

迷いながら辿り着いた天職とも自負する精神看護学を、これから東北大学の学生の皆さんと一緒に深めていけることはとても幸せだと思っています。私は、精神疾患の早期介入とスティグマに関する研究をしていますが、これらに興味がある方、是非一緒に研究しましょう（お手伝い歓迎）。

それでは皆様、どうぞこれから宜しくお願いいたします。

趣味：お茶、着物、太極拳、美術鑑賞、釣り、声楽、ベリーダンス

好きな食べ物：ごはん、日本酒、和食、ロールケーキ

将来の夢：蔵が欲しい

老年保健看護学分野　助手　坂川　奈央

はじめまして。今年の４月に老年保健看護学分野の助手に着任いたしました、坂川奈央と申します。以前は東京の病院で看護師をしていました。更にそれ以前は、保健師として

途上国で生活をしていました。「寝る場所があれば十分」と、今の日本での生活を思えばかなりサバイバルな生活だったと思います。日常的且つ何の予告もなく電気・水は止まり、貯めていた水が枯渇したときは川で水浴びをしていました。土地の文化・習慣や現地の人々の生活の理解のため、中でも貧困層の生活を理解するためにその家に泊まらせてもらったこともあります。（スラムなどの最貧困地域は流石に危険なので無理でした。それにしてもお金のない家に泊まり、食事まで頂くなんてかなり図々しいですね。）当初は現地語もわからず、価値観も宗教も全く異なり、辛いと思う時もありました。しかし、かけがえのない貴重な経験と辛かった分だけのタフネスを得ることができたと今では全てに感謝しております。こうしてやりたいことを邁進し続け、縁あって東北の地に参りました。ちょっと変わっているので、浮いている時があると思いますが、大目に見ていただければ幸いです。今後ともよろしくお願いします。

平成24年度保健学科総会および帰朝報告

7月6日（金）午後5時半～6時半、平成24年度保健学科同窓会総会が開催されました。今年度から総会を二部構成とし、第一部は以下のような議題で議事を進めました。

・保健学科同窓会新役員の件
・平成23年度の決算報告
・平成24年度の予算案
・その他

第二部は「大学院生による帰朝報告」と称して、各専攻一名ずつ代表者を選出し、研究内容や国際学会等での発表の様子を報告していただきました。今回は、その中からお二方の帰朝報告の内容を少しご紹介させていただきます。

検査・内分泌応用医科学
博士前期課程2年　西山　浩史

西山浩史さんは、5月4日～5月11日にイタリアのフィレンツェで開催された「第十五回国際内分泌学会兼第十四回ヨーロッパ内分泌学会」に参加し、『Effect of triiodothyronin and angiotensin II on expression of (pro)renin receptor in the human erythroid cell line, YN-1』というタイトルで発表されました。

西山さんは、国際学会に参加した感想を以下のように述べています。

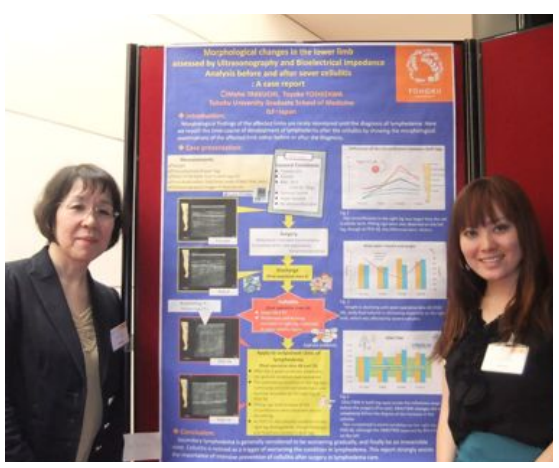
「今回の学会参加を通して、まず自分の英語能力の未熟さを感じました。やはり世界レベルで活躍できる人間となるために英語は必須であり、今後更なる努力が必要であると感じました。また、学会場での発表では、やはり知識の幅が違うと感じ、医療全体の知見から研究を評価できるようになりたいと感じました。さらに、この派遣においては私自身初めて一人で海外へ行ったということで、たくさんの現地の方々と触れ合うことができ、未知の文化に触れあうことに大きな楽しさを感じました。今後またこういった機会があれば積極的に参加し、自分自身を高めていきたいと思いました。」

発表では、イタリアの綺麗な街並みや風景の写真を沢山紹介してくれました。私たちも機会があれば是非足を運んでみたいものです。西山さんの今後のご活躍、期待しています。

ウィメンズヘルス看護学分野
博士前後期課程1年　竹内　真帆

看護学専攻博士課程1年の竹内真帆さんは、下肢リンパ浮腫の治療や患者のQOL向上のために必要な、下肢リンパ浮腫の適切な評価方法の開発を研究しており、その研究成果を数々の国際学会で発表されてきました。2011年2月10日～11日には、韓国での14th East Asian Forum Of Nursing Scholarsで「Application of Ultrasonography to Assess Lower Limb Lymphedema」という題目で口演発表を行っています。また、2011年6月16日～18日にはカナダのトロントにて、2012年7月28日～30日にはフランスのモンペリエにて3rd, 4th International Lymphoedema Framework (ILF) に参加しています。3rd ILFでは「Assessment of Lower Limb Lymphedema with Ultrasonography」、4th ILFでは「Development of a Quality of Life Measure for LIMB LYMPHOEDEMA(LYMQOL) Japanese version」を口演しています。

そして、竹内さんは現在イギリスのグラスゴーで研究課題に取り組んでいます。この留学は、竹内さんが修士課程時に平成24年度大和日英基金東北スコラーシップ（ブリティッシュ・カウンシル提携）という英国の教育期間における大学学部または大学院レベルの学位取得目的のコースに対する奨学金を獲得したことにより実現したものです。ウィメンズヘルス看護学分野のホームページ（http://www.womens.med.tohoku.ac.jp/）には、竹内さんの留学レポートがアップされていますので、どうぞご覧ください。



編集後記

今回は諸事情により発行が遅れてしまいました。楽しみにしてくださっていた皆さん、申し訳ございませんでした。今後も保健学科同窓会を何卒宜しくお願いします。

画像診断学分野　髙根侑美